

# 自伝を通して見た H. B. ニューエル

北 垣 宗 治

はじめに

敬和学園大学は創立6年目にあたる1997年11月に二つの新しい建物を与えられた。堂々とした威容を誇る体育館と、新発田館に隣接する講義棟の増築である。前者はパーム (Theobald Adrian Palm) 体育館であり、後者がニューエル (Horatio Bannister Newell) 館である。パームについては新潟の医師、医学史家、俳人である蒲原宏先生や、元敬和学園高等学校教頭で現在同志社大学神学部教授である本井康博先生の論考等によってかなり詳細に紹介されている。しかしニューエルについては長岡教会の日曜学校で幼い頃の山本五十六の先生だった人、そしてのちに新潟教会の牧師をしばらく務めた宣教師、といった程度しか触れられることがない。私はこれらの校舎の名付け親として、ニューエルがいったい何者であったかを敬和学園大学の役員、教職員、学生の皆さんに伝える義務があると感じてきた。今回、ニューエルの自伝がケーリ家文書の中からみつかったので、この機会にそれに基づきながらニューエルを紹介してみたいと考える。(本稿の骨子は、2005年11月25日の敬和学園大学チャペル・アセンブリー・アワーにおいて、「ニューエル館のニューエルとは？」という題で講演した。本稿は講演原稿を修正増補したものである。)

## 1. ニューエルの略歴と彼の自伝

まずニューエルは新島襄や内村鑑三、また新井明学長や金山愛子助教授の学ばれたアーモスト大学 (Amherst College) の出身であるので、同大学の卒業生の『略歴記録』 (*Amherst College Alumni Biographical Records* [Amherst College, 1963]) のニューエルの項を訳してみよう。これは本人の申告に基づいて編集されているので、正確な記録であると見なそう。

ニューエル、ホレイショー・バニスター Wellington 牧師と Lydia A. (Frost) の息子。メイン州 East Orrington に1861年8月27日に生れる。[1883年アーモスト大学卒業、A. B. ]。1887年シカゴ神学校卒業、B. D. 1901年アーモスト大学 M. A. 1906年アイオワ州 Tabor College から名誉神学博士号。1923年アーモスト大学から名誉神学博士号。[ 所属の Fraternity は ] Chi Phi. 出身高校は Williston Academy

1883-84年ニュー・ヨーク州 Mechanicsville Academy で教える。1884-87年シカゴ神学校に在学。1887年8月25日按手礼を受ける。1887年アメリカン・ボード宣教師として日本に派遣される。1887-92年長岡。1892-1904年新潟。1904-23年松山。1923-30年朝鮮ソウルの日本人教会副牧師。1930-31年アメリカン・ボード代表団の一員として奉仕。1931年退職。松山女学校理事長。1905-28年京都の同志社大学理事。朝鮮ソウルの日本WMCA理事。日本と日本人に関する論文多数。東洋学会 (Claremont College) 会員。木曜クラブ、大学クラブ、Scrooby クラブ (クレアモント)、アフタヌーン・クラブ (ポモナ流域) の各会員。1889年7月3日、オハイオ州クリーヴランドのJustus L. Cozad の娘 Janeと結婚。子供は Florence C (Kenneth S. Beam 夫人)、Justus W. (死亡)、Harriet (Hunter夫人)、Horatio (アーモスト大学1922年組)。兄弟は John W. (アーモスト大学1886年組)、Arthur F. (アーモスト大学1889年組)。1943年8月14日、カリフォルニア州クレアモントで永眠。

ニューエルの自叙伝は英文のタイプ原稿で164ページのものである。ニューエルは1931年にアメリカン・ボード宣教師たちが隠退生活を送る、気候の温暖な、ロサンジェルス郊外のクレアモントに引退し、1943年に亡くなるまで12年間の余生を楽しむことができたから、この時期にこういう自伝を書き残すだけの時間と、気分的な余裕があったものと思われる。この自伝は彼の幼少年時代、学生時代、宣教師時代が中心である。宣教師としての彼は長岡で5年、新潟で12年、松山で19年、ソウルで7年をすごしたのであるが、長岡と新潟の記述が詳しく、松山時代がそれに次ぐ。ソウルについては、どういうわけか、当時の彼の日本語教師兼秘書のこと以外、ほとんど何も書いていない。ソウル時代についての空白はこの自伝の謎であるといえよう。

## 2. 幼少年時代

以下、できるだけその自伝に従いながら、私が得た情報で補いつつ記述してみることにする。ニューエルは1861年にメイン州のEast Orringtonに生まれた。メイン州のほぼ中央に位置する Bangor から南に約10マイルのところにある小さな村が East Orrington である。Horatio という名前は叔父の Horatio Nelson Newell から、またBannister というミドルネームは祖父の Seth Bannister Newell から来るといふ。父のウエリントン・ニューエルは村の会衆派教会の牧師だった。父はニューエルが生まれて5か月経つと Penobscot川を隔てて Bangorと相対するBrewerという村の牧師になった。

ニューエルが三歳半だった頃 (1865年4月) のエピソードがある。ある日のこと、牧師館のドアに黒い布切れがかかっていた。幼いニューエルがその布切れを外しておもちゃにしていたところ、母はそれを静かに取り上げ元に戻し、叱ることなく、目に涙を浮かべな

がら、「これはね、ホレーショーや、リンカーン大統領が亡くなられたので、こうして悲しみを表しているのよ、これはこのままにしておこうね」と、やさしく説明したのであった。

八歳のときの恋の記録もある。ホレーショーが憧れたのは三歳年上の姉 Lucinda の友達 Annie Chambers だった。彼はしきりに姉たちの仲間に入って遊びたがった。ある日彼はアニーから手ひどく、“Trundle-bed trash!” と言って、邪険に退けられ、幼い恋は破れた。この表現のニュアンスを正確に理解することは私に困難だが、「のろまのベイビーなんか、あっちいけ！」とでもいうところか。(ニューエルは半世紀たってもアニーのことを忘れていなかった。1923年にブルーワーを再訪したとき、アニーの消息を調べたところ、彼女は精神病院に入っていることが分かった。)

幼いホレーショーにとって、一年中で一番楽しい行事は日曜学校の遠足だった。弁当を作ってもらい、日曜学校の先生と生徒が総出で出掛ける気分は天にも昇る心地であった。しかしホレーショーはある年、両親から厳しく言い渡されていた掟を破ったために、罰として、この遠足に参加することを禁じられた。両親から厳しく言い渡されていたことは、大人の付添いなしに大川(ペノブスコット川)へ遊びにいはならない、ということだった。ことに春先の増水する時期にはよく子供が水死したからである。遠足に行けなかった彼は、犬の Gyp と、ペットのヘビに悲しみを打ち明けながら、悶々の時間を過ごした。このエピソードにニュー・イングランドの家庭教育の片鱗を垣間見る気がする。

ブルーワー時代のニューエル家の子供たちにとって、メイン州ポートランドは大都会に思えた。その町に金持ちの親戚が二軒あった。ホレーショーはそこで初めて、栓をひねれば水でも湯でも出てくる設備や、バスタブ、水洗便所、ガス灯(それがすべての部屋についていた)、大型のガラス窓とカーテン等を経験した。こういうものは、年収600ドルの田舎牧師の家庭ではとうてい望めなかった。

それから数年たつと、父はメイン州内でもっと西の、New Hampshire 州との州境に近い North Waterford の牧師館に移り、ここでニューエルは10歳から12歳までの伸び盛りの時期をすごした。学校よりも戸外の生活がホレーショーの教育であった。馬の世話(父は牧師でありながら馬が好きで、よく馬車で隣のマサチューセッツ州、ニュー・ハンプシャー州、ヴァーモント州までも遠出した)。馬に鞍を置く技術。牛の世話(父はホレーショーを連れて、6マイル離れた農家に牛を買いに行き、息子に、買った牛を一人で家まで連れて帰ることを命じた)。乳搾りの技術。庭造り。養鶏(ある晩スカンクが鶏舎に入り、50羽いた鶏のうち49羽を食べた。この時はホレーショーも大声を上げて泣いた)。狩猟(銃の使い方は父が教えた)。雪掻き。カマクラ作り。四頭の馬に轡を引かせる楽しみ。スケート(父から習った)。二頭の牛をチームにして田を鋤かせる訓練(これには非常な忍耐を必要とした)。木こり(マサカリの使い方を習った)。なめし皮作り(牛からり

スに至るまでの動物のなめし皮。ホレーショーはこの仕事が好きで、一時なめし工になる野心を抱いた)。兎狩り (その他 woodchuck, muskrat なども狩った)。魚釣り (彼はマス釣りにかけては名人で、その川で最大のマスを釣り、英雄視された。彼はシャツの端切れをエサにしてカワカマスを釣ることもできた)。水泳 (父から習った)。森の生活。牛乳からバターやチーズを作る技術。サイダー作り。大工仕事。教会堂のストーヴたき、鐘ならし、掃除、雪かき。現代の日本の農村に、一人の少年にこれだけのことをやらせる環境があるであろうか。

### 3. 高校・大学時代

ニューエルは1873年から76年にかけて、マサチューセッツ州 East Hamptonにある Williston Academy で高校教育を受けた。彼はギリシア語とラテン語が非常によくできる生徒だった。夏休みになると、真剣にアルバイトに励んで、学資を稼いだ。ウィリントン高校からは、近くのアーモスト大学に進学する者が多い。明治政府の開拓使に招かれて札幌にやってきた William Smith Clark もウィリントンからアーモストに進学した人である。しかしニューエルはアーモストよりもハーヴァードに行きたかった。彼の蓄えからはとうてい学費が出せないで、ニュー・ハンプシャー州のホワイト・マウンテンズの中のリゾート・ホテルでのアルバイトに打ち込んだ。入学を一年遅らせてでもハーヴァードに入りたいと思っていたニューエルを、親切でまじめな友人が説得し、無理やりにアーモスト大学への入学手続きをしてくれた。アーモストではすでに新学期が始まって3週間が経っていたが、彼のウィリントンでの成績がよかったので、幾何、地理、英文法という三科目の試験に合格することを条件として、入学を許可した。

ニューエルがアーモストで学生生活を送ったのは1879年から1883年までの4年間である。アーモストには新島襄以降、日本人がぼつりぼつりと入っているが、彼が入学した1879年は神田乃武が卒業した年であり、また下野の国壬生の藩主だった鳥居忠文が1年間の留学を終えた年だった。また古谷野敬三という日本人が1881年から1885年まで在学していたから、ニューエルとは2年間重なるが、ニューエルの自伝には古谷野のことは何一つ出てこない。内村鑑三のアーモスト時代は1885年から1887年にかけてである。つまりニューエルの卒業後2年たって内村がアーモストに入ったのである。

彼が在学した時期のアーモストには非常に優れた教師がいた。ニューエルは Seelye, Tyler, Root, Hitchcock, Mather, Morse, Harris, Emerson, Todd, Garman と、10人の先生の名を挙げ、この人たちはどこに出しても恥ずかしくない教授だと断言する。しかもこの10人の中の最高峰はシーリー学長だったと書いている。この先生たちから直接にどのような感化を受けたかについては書かれていない。しかしシーリーが学生の一人一人を覚えていたことについて、ニューエルはこんな思い出を書いている。卒業後4年たった

1887年のこと、ニューエルは母校の卒業式に出てみた。ニューエルは一人の日本人が羽織袴姿で堂々と卒業証書を受けるのを見た。内村鑑三である。その日の学長リセプションのとき、ニューエルはシーリー学長にむかって、「学長、私が誰だか分かりますか？」と訊いた。この4年間でニューエルは髪の毛が薄くなり、ヒゲをはやし、メガネをかけるようになり、容貌には大きな変化が生じていた。シーリー学長は彼の顔をじっとみつめ、「待てよ、待てよ」と考えてから、「もし間違っていなければ、君はホレーショーBだな」と、言い当てたのだった。

アーモスト大学時代、ニューエルは宿舎の Chi Phi の自室に黒い優雅なヘビをペットとして飼っていた。よく訓練されたヘビで、彼が外から帰ってくると箱から抜け出して部屋の隅まで這っていき、エサを貰うために鎌首を持ち上げる。食べ終わるとヘビはニューエルが本を読んでいる間、机の上で何時間でもとぐろを巻いてじっとしていた。ヘビに対する愛着は日本の長岡時代まで続いた。それについては後述する。

アーモスト大学にはニューエルと顔かたちがそっくりのクラスメートがいて、そのためシェイクスピアの喜劇「間違い続き」さながらの喜劇的場面が起った。おまけに、彼の兄のジョンが遅れて入学してきて、そっくりさんが3人となり、間違い続きが際限なく続いた。

#### 4. 校長代理・神学校時代

1883年アーモスト大学を卒業する時、ニューエルはワイオミングでカウボーイになるつもりであった。大学を出てカウボーイとは驚くべき転身だが、たまたま彼の父が病気になったため、その計画は消えた。カウボーイの代わりに彼が選んだのは、隣のニュー・ヨーク州 Mechanicsville にある Ames Academy の校長代理となることであった。この学校には生徒が約百人おり、教員は8人だった。彼は管理職を務めるかわら、ラテン語、ギリシア語、数学を教えた。この学校に野球を導入して、校長代理としての評判はよかった。しかし彼の心中には、天職の意識が芽生えつつあった。それは父の職を継いで牧師となり、神と人に仕えることである。彼は校長代理として得た金を学資として神学校に進むことを決意した。アーモストのシーリー学長に相談すると、アンドーヴァー神学校を薦めてくれた。しかしニューエルはさらに熟慮の末、シカゴ神学校を選んだ。

ニューエルがシカゴ神学校で過ごしたのは1884年から1887年までの3年間である。当時シカゴ神学校には四人の優秀な教授がいた。その四人とは校長の Franklin W. Fisk (Homiletics), S. I. Curtis (Old Testament), Boardman (Theology), Scott (Church History) である。この神学校の当時の制度では、学年の前半に教室で授業を受け、後半はフィールド・ワークとして地方の教会に派遣され、牧会の訓練を受けることになっていた。初年度の後半に彼が派遣されたのはネブラスカ州 Long Pine という村で、

ここで彼は一種のフロンティア体験をすることになる。フロンティアでは、自分は会衆派の牧師であると主張したところで、無意味である。背景が長老派の人、メソジスト派の人、バプテスト派の人、いろいろである。伝道していくには、教派を超越しなければならない。必然的に、それは ecumenical な考え方に向かうことになる。こうした経験が後年、日本で仏教徒との対話を可能にしたといえるかもしれない。この年、次の年のフィールド・ワークについても比較的詳しく体験したことを記述しているが、先を急ぐので、ここでは割愛させて頂くことにする。

新島襄の名前はこの自伝に2回出てくる。新島は1885年11月9日、ボストンから日本に帰る途中にシカゴを訪れ、神学生たちに約半時間のスピーチをしている（『新島襄全集』8:360）。ニューエルが新島の面接を受け、宣教師として日本に行くよう熱心に奨められたのはこの時のことだったと考えられる。彼はその時まで、宣教師として外国に行くということを考えてみたことがなかった。別の機会に Hume というインドに派遣されていた宣教師から、インドへ行くようにとさかんに勧誘された。結局彼は宣教師になる決意を固めたが、派遣先が日本になるか、それともインドになるかは、アメリカン・ボードに下駄を預けることにした。ボードでは日本、それも京都に派遣することに決めた。京都ということは、同志社で教師を務めることを意味していた。

ニューエルは1887年8月25日に、マサチューセッツ州グリーンフィールドの、父がしばらく牧会していた会衆派教会で挨拶を受けた。アメリカン・ボードを代表して、主事の Judson Smith が出席して「ニューエル牧師」に激励を与えた。彼は父の面前で初めて説教した。日本に発つ前にボストンのアメリカン・ボード本部に挨拶に行った。総主事の N. G. Clark 博士が別れ際に玄関まで彼を見送り、与えた忠告は、“Go out, and be a lazy missionary!” というものだった。若くて情熱に富む新任の宣教師は遮二無二働き、5年もすると体を壊してアメリカに帰ってくるといった例がよくある。そういうことにならないよう、「怠け者」の宣教師であれ、というのである。これは心の温まる忠告だった。ニューエルにはクラークの忠告は痛いほど分かっていた。ニューエルは自分のペースを守る人であった。（彼はそれから9年後の1896年に最初の休暇で帰国するが、日本での最初の9年間にホームシックにかかるとか、神経衰弱になるとか、過労で倒れるということとはなかった。）

## 5. 宣教師として日本の新潟へ

ニューエルは太平洋航路のベルジック号という客船に乗って日本に向かった。同船したアメリカン・ボード宣教師の中に、Mr. and Mrs. Cyrus A. Clark, Cornelia Judson, Matilda Myers, S. C. Bartlett がいた。このうちバートレットとは生涯の友情を結んだ。いよいよ横浜に到着したのは1887年9月28日のことだった。1887年当時では日本の玄関

ともういべき横浜港でさえも船は岸壁に着くのではなく、岸から離れた、少し沖合いに停泊し、迎えに来る小蒸気船に乗って上陸するのであった。堂々たる体格の西洋人紳士が小蒸気船に乗ってやってきてニューエルを探し当て、自分は Henry Martyn Scudder だと名乗った。そして、あなたには新潟に来てもらう、と宣言した。ニューエルはすかさず、自分は京都に行くようにとボストンの本部で言われましたと主張したが、アメリカン・ボードの日本ミッションでは、夏の集まりにおいて熱い議論をした結果、ニューエルの新潟所属を決めてしまっていたのであった。ニューエルとしてはスカダー博士の言葉に従わざるをえなかった。

横浜から東京へは日本におけるアメリカン・ボード宣教師第一号である D. C. Greene 宣教師が案内した。東京では米国公使の Hubbard, 番町教会の小崎弘道牧師、social settlement の創始者である片山潜をそれぞれ表敬訪問している。それからいよいよ日本の旅が始まった。一行は総勢12人で、ニューエルとジャドソン以外の宣教師たちはその夏を比叡山のテント村で過ごし、横浜で二人の新人を出迎えた上で新潟まで帰るところであった。新人たちにとって、これはいわば日本へのイニシエーションの旅であったといえよう。12人の内訳はスカダー博士の息子の Doremus Scudder (案内役) と、その姉の Kate Scudder、両親の H. M. スカダー夫妻、Mrs. E. C. Kendall (のち Doremus Scudder と結婚する)、Miss M. L. Graves, Miss Cornelia Judson (ジャドソンは後年四国の松山でめざましく活躍する)、ニューエル自身、さらにケンドール夫人の日本語教師である日本人女性、荷物を担ぐお雇いの日本人3人。これで合計12人になる。この一行12人は先ず東京から福島県郡山まで汽車で行き、郡山で一泊し、郡山からは駕籠に乗って猪苗代湖に至り、湖を小蒸気船で渡り、会津若松に一泊。再び駕籠で阿賀野川の船着場まで行き、阿賀野川下りをして、合計三日間で新潟に着いている。(それより18年前の1869年、S. R. Brown 夫妻と Miss Mary E. Kidder が横浜から高崎、安中をへ、碓氷峠を越え、千曲川、信濃川沿いに16日間かかって新潟まで行ったことを思えば、これは大した進歩である。)

## 6. 新潟・長岡時代

ニューエルが新潟入りした頃、新潟では北越学館が開校したばかりで、ニューエルはさっそくそこで英語を教え始めた。新潟には George Albrecht 宣教師夫妻も来ており、ニューエルは最初アルブレヒト家に泊めてもらっていた。親切な同僚に囲まれ、またよく勉強する生徒にも恵まれ、彼は愉快的な教師生活を始めることができた。これは内村鑑三が「教頭」として着任する直前のことで、内村が来るまでにニューエルは長岡に移っていたから、内村と北越学館で共に働く機会はなかった。ニューエルはさっそく日本語の家庭教師を雇い、この難しい言語の習得にできるだけの時間を費やした。彼はこの時から43年間

に日本語の教師を次々に10人雇っており、彼の自伝にはそのリストと、それぞれの先生についての簡単なコメントを残している。これらの家庭教師は月日がたつにつれて、ニューエルの個人秘書のような役割もはたすようになる。3人目の日本語教師は大宮季貞で、この人は新潟教会の第5代牧師である。大宮はのち京都に移り、ラーネッド宣教師の仕事を手伝うが、ラーネッドに大宮を紹介したのはニューエルだった。4人目の日本語教師は今泉真幸で、この人は日本組合教会の理事長、日本聖書教会の理事長となり、1954年の口語訳聖書の刊行をはたした人である。

1887年当時、新潟在住の宣教師団はアメリカン・ボードの日本ミッションとしては京都の宣教師団に次ぐ人数だった。やがてニューエルは、長岡にできた学校がアメリカ人教師を欲しがっているという情報を得た。彼には10人もの宣教師のいる新潟を離れて、自由と独立を楽しみたいという欲求が湧き起こってきた。そこで新潟の宣教師団の了承を得た上で、長岡に移住することに決めた。長岡では1887年に町の有志3人が金を出し合って一つの男子学校を発足させていた。ニューエルは加藤ケイノスケという、彼の日本語教師第一号と、鈴木トクジ（トクさん）という料理人とを連れ、3人で、学校が用意した長岡の日本家屋に移り住んだ。長岡学校との約束は、日に2時間だけ英語を教えるということで、あとは自由だった。こうしてニューエルは長岡に「定住」した外国人第一号となった。

当時長岡学校には約50人の生徒と8人の先生がいた。生徒とニューエルの関係は非常によく、生徒たちもよく勉強した。当時英語は出世のための重要な手段と考えられていたようである。ニューエルはまた先生たちへのサービスも忘れなかった。先生たちのために定期的に時間を作り、質問に答えることにした。そのうちに彼は学校の許可を得て、毎日授業の始まる半時間前を礼拝の時間とし、生徒たちの自由な出席を求めた。通訳は英語の先生や、長岡教会の初代伝道師、白石村治（安中出身で、新島を慕って同志社に行った人）などが務めた。本場の英語が聞けるということは生徒たちにとって魅力だったに違いない。仏教のさかんな長岡だったが、ニューエルの場合、迫害を受けたことはなかったようである。それは彼の常に友好的な人柄によるものであったといえよう。

長岡学校では生徒たちと共に山登り、弓道、凧揚げ（800メートルもの長さの糸を繰り出したという）を楽しんだ。しかし生徒たちが最も喜んだのは野球で、ニューエルははからずも長岡（あるいは中越）への野球の導入者となった。これは1888年頃のことである。生徒数がふえるにつれて、長岡学校では今までの校舎では収容しきれなくなった。その頃、郡立の農学校が廃止となり、その校舎が空いたので、それを長岡学校が使用することになった。学校は私立から長岡町立に移管され、ついで郡立となった。さらに後ほど県立となり、これが現在の長岡高校の前身になったわけである。長岡学校時代の傑出した生徒には、後に東京帝国大学総長となった、わが国のアカデミックな政治学の創始者といわれる小野塚喜平次（1870-1944）博士がいる。またこの学校で学び、クリスチャンとなった人の



中に、小塩高恒（1872-1943）がいる。この人は後に同志社の神学校に学んでクリスチャン・ソーシャル・ワーカーとなり、留岡幸助の右腕と謳われた人である。（彼の長男が小塩力牧師であり、その子息がフェリス女学院の元院長、ドイツ文学者の小塩節氏である。）長岡学校の出身者からはたくさんの仏僧も出ている。ニューエルは松山時代の1920年に長岡を再訪しているが、そのとき彼はクリスチャンの友人たちだけでなく、僧侶となっていた元の生徒たちからも、負けないほど熱烈な歓迎を受けたことを自伝に記している。

ニューエルは1889年7月3日に東京で新潟の宣教師 Jane Cozad との結婚式を挙げた。司式をしたのは当時の新潟ステーションの名誉長老ともいふべき H. M. スカダー博士だった。自伝であるから、ジェインを好きになった事情を述べてほしいところだが、まったく何も書いていない。8歳の頃のアニー・チェンバーズに対する恋心について、あれほどあけすけに書いたニューエルでも、やはり結婚相手のことになると、自伝の読者である子孫の手前、心のときめいたロマンスを語ることは恥ずかしかったのであろう。ジェインの妹の Gertrude Cozad も宣教師として新潟ステーションに来ていた。姉妹の姉の Olive はクリーブランドの Theodore Bates と結婚し、その娘 Rosamond Bates は宣教師となり、神戸女子神学校（聖和大学の前身）で教えていた叔母の Gertrude Cozad を頼って神戸にやってきた。ロザモンドは宣教師 Frank Cary と結ばれて結婚し、その息子が同志社大学におけるアーモスト大学代表を長らく務めた Otis Cary 教授である。従ってケーリ教授にとってニューエルは大叔父にあたる。（コザッド家は1807年にペンシルヴァニアからオハイオへ移住したフランス・ユグノーの家系である。）

長岡ではこの町に定住した外国人第一号であるニューエルが結婚する予定と聞き、ニューエルに対する感謝と、できるだけ長く長岡に滞在してもらいたい希望を表すために、洋式の教師館を建てることにした。ニューエルは固辞したが長岡の人たちは資金は準備されているからといって聞き入れず、設計図を見せた。ニューエルは恐縮しつつ、closet, chimney, porch, double windows を取り付けてもらえれば有難い、ということにして設計図を返した。建設は新婚のニューエル夫妻が二、三週間を鎌倉ですごし、その後を比叡山のテント村で過ごしている間に進められた。9月に長岡に帰ってくると、教師館は見事に完成してニューエル夫妻を迎えた。これは長岡における最初の洋式建築だった。（この建物「長岡ハウス」はニューエルが長岡を去ったのち美術館、仏教の学校、川上医院、警察署、長岡警察本部として有効に使用されてきた。1920年頃この建物は取り壊され、あとに長岡中央警察署が建っている。）

ニューエルの持つ学位はアーモスト大学の A. B. とシカゴ神学校の B. D. だったが、長岡学校では学校に箔をつけるために、ぜひ Master of Arts を取ってほしいと要望してきた。そこでニューエルは母校アーモスト大学の学位委員会あて手紙を書き、自分のためというよりは日本の勤務先の名誉のために M. A. を授与して頂きたい、については次のような

主題で論文を提出する用意がある、「漢字について」、「日本語について」、「日本の仏教について」、「日本の封建制度について」、と訴えた。委員長の David P. Todd 教授から返事が来た。委員会で君の要請を検討した。暑い夏にさしかかるところであり、誰も漢字についての論文を読みたい人はいない。学生時代の勉学態度からしてニューエルならば M. A. の資格十分と判定するので、次の卒業式に、本人欠席のまま、M. A. を授与することにするとあった。こうして長岡学校では生徒募集の広告に「米国マスター・オブ・アーツニューエル先生」という表現を誇らしげに用いることになった。(最初に紹介したアーモスト大学の記録では M. A. が1901年であり、これは新潟時代に入る。この齟齬はなぜなのか、現在確かめることはできない。なおトッド教授は天文学者で、1887年8月19日の皆既日食を観測するために米国科学アカデミーから日本に派遣されたことがある。)

宣教師だったニューエルは、もちろん聖日には長岡教会を支援し、日曜学校で教えていた。ケーリ家の伝承によると、ニューエルはよくポケットにヘビをしをのばせており、子供らを見かけるとそれをそっと取り出して見せたという。子供らは驚いて後ずさりするが、子供特有の好奇心から、この変な外人のあとをぞろぞろついていき、結局長岡教会の日曜学校へと招き入れられたのであった。この日曜学校に、幼い頃の山本五十六が通っていた。当時の山本は高野姓であった。父、高野貞吉の日記に、ニューエルのことがでてくる。孫の力や末息子の五十六がニューエルのところに入出入りしたことが記されている。貴重な記録としては、新潟へ引越すニューエルを信濃川の船着場(蔵王)で見送ったという書き入れがある。これは1892年9月6日のことである。「晴、大暑、ニューエル氏新潟移住に付蔵王迄見送る。朝蒸気、同人へ四人にて汗拭を贈る」(『長岡教会百年史』p. 76)ここに「四人」とあるのは、父の貞吉、息子の五十六、孫の力、あと一人はのちに牧師になった、息子の丈三を指すかもしれない。当時まだ信越線は開通しておらず、長岡・新潟間の交通機関としては蒸気船が用いられていたのである。

ニューエルが居心地のよい長岡から新潟へ移ることになった理由は、新潟ステーションに大変動が起きたためである。震源は Kate Scudder で、彼女が急性の肺結核にかかり、アメリカに帰って治療することになった。そのため医師であった弟の Doremus と、彼の夫人となっていたケンドール夫人も付添って帰米することになった。すると、息子と娘の応援のつもりで新潟に来ていた老スカダー夫妻も当然帰国することになり、スカダー一家五人が去ることになった。加えてアルブレヒト宣教師は前橋へ移り、その後同志社神学校でどうしても必要、ということで、京都へ移った。このため新潟ステーションには男性宣教師が皆無となり、ニューエルは長岡に留まることができなくなったわけである。

新潟入りしたニューエルは1年間、北越学館の後身である北越学院で、また妻のジェインは新潟女学校で教えた。しかし、学校の財政を支えてきたクリスチャン政治家の加藤勝弥がその頃から、財政支援が思うにまかせなくなったことと、新潟にも県立中学ができ、

生徒募集で北越学院に打撃を与えたことが重なり、関係者たちの間ではまだ余力のあるうちに閉校するのがよい、という結論となり、新潟における最初のキリスト教学校、北越学館と新潟女学校は6年間でもってその歴史に幕をおろした。

1893年までのニューエルの主な仕事は学校教師、すなわち教育宣教師としての仕事であったが、それ以降は福音を説く伝道者としての仕事になっていった。彼の住んでいた宣教師館には付属の図書室がついており、廃校となった北越学館の図書がそこに移されていた。ニューエルはそれを一種の無料図書室にして、一般市民に開放していた。新潟中学、新潟商業、新潟師範、そして仏教学校（この学校の正規の名称は不明）という四つの学校が近くにあったので、この無料図書室は生徒たちによく利用された。そのようにしてやってくる人から相談を受けたり、キリスト教について質問する人に答えたりすることが、彼の日常となった。ある時には仏教学校で教えている高橋Kという人が、聖書に興味を持ってニューエルに質問に来たことから知合いとなり、ニューエルは高橋に聖書を教え、代わりに高橋から仏教の経典について勉強するようになった。ほほえましい交換授業である。ある日高橋は経典の一節を示して、自分はここを千回も読んでいるが、どうしてもその意味がわからない、と言った。ニューエルは Max Müller の仏教聖典英訳の中にその経典の訳があることに気が付き、その英訳の箇所をゆっくりと日本語に訳して聞かせた。高橋はじっと耳をすませて聞いていたが、にっこり笑って、分かりました、と言い、心から感謝した。漢字のテキストからはどうしても意味がわからないのに、英語訳のテキストがその意味を啓示することがある。翻訳といういとなみの思いがけない効果である。その後高橋Kはキリスト教信仰を受入れ、仏教学校の教師を辞任し、函館の長坂鑒二郎牧師のところに、ニューエルの紹介状を持って移住し、クリスチャンとしての生涯に入った。

ニューエルは沼垂に適度な家を見つけ、講義所として使うことにした。ニューエルと大宮季貞が協力して担当したり、またニューエルと今泉真幸がペアを組んだこともあった。しかし沼垂では妨害に出くわした。この講義所に石が投げ込まれ、戸口が壊されたりして、家賃よりは修理費の方がかさんだ。ある夕方、ランプの下でニューエルが聖書を手にして講義していると、耶蘇教反対の連中が投げた石つぶてがランプにあたり、ランプは消え、その油が彼の手の上に飛び散ったことがあった。ニューエルはこうしたいやがらせを受けても我慢し、あらがうことはなかった。彼はクリスチャンであれ仏教徒であれ、たくさんの日本人と友情を結んだことを具体的に自伝の中に記録している。ニューエルは1901年の初めから2年間にわたり、大宮季貞の後をうけて新潟教会の第6代牧師に就任している。宣教師が牧師を務めることはむしろ異例であって、適当な日本人牧師が見つかるまでのいわば臨時措置であったと考えられる。

## 7. 松山時代

こうしてニューエルは日本での最初の17年間を長岡と新潟ですごした後、1904年の夏に四国の松山に移った。松山にはアメリカン・ボードが支援してきた女学校である、のちの松山東雲学園と、働く少年たちのための夜学校で、のちに松山城南高校となる学校があり、ニューエルは両方の学校で教師、理事、そして理事長を務めた。彼の松山時代は19年間に及ぶが、自伝で見える限りでは新潟・長岡での体験ほどにフレッシュな感じがしない。ニューエルが松山に移ったのと時を同じくして、愛媛県に小林という知事が着任した。小林が新潟県人であったことから、彼はニューエルを厚遇するようになり、このことが松山女学校に何かと利益をもたらした。おまけに、1904年に松山中学の校長となった広田一乗は新潟県新発田の人で、前職が新発田中学の第二代校長であり、そういう関係からニューエルは公立中学で“Baseball and Ethics”という主題で講演したりしている。キャプテンへの忠誠、チームプレイの価値、犠牲打の意味、などを中心に話したようである。以下に松山時代の目立つエピソードを二つ紹介したい。

第一のエピソード。ニューエルが松山に行ったのは1904（明治37）年で、日露戦争が起きた年だった。しかも松山はロシア兵の捕虜2,000人から3,000人を収容した町だった。捕虜のうちの士官は、市内を自由に行き来することが許されていた。ニューエルは松山でも、市内で唯一の洋館に住んでいたため、毎週火曜日をオープン・ハウスの日と決め、ロシア人を迎え、コーヒーとサンドイッチをどっさり用意してもてなした。時には50人もの士官がやってきた。ロシア人たちは暇をもてあましており、合唱団を組織してよく練習し、時折すばらしいコンサートを宣教師館で開催した。この時期ニューエルが町を歩いていると、ロシア人とまちがわれることがしばしばあり、殊に松山の市外に出たときには、脱走したロシア人として逮捕されかけたことがある。またロシア士官の中には淋しさに耐えかねて、H. Frances Parmelee という女性宣教師（以前、同志社女学校で教えていた）に恋心を抱き、どうしても結婚したいと言い出した人もいた。この時パーミリー女史は52歳。しかし、日露戦争の最中、松山でニューエルがロシアの捕虜たちのために尽くした、心からの奉仕活動を無視することはできない。

第二のエピソード。当時松山の最高の旅館で、夏目漱石ゆかりの城戸屋の主人との交遊についてである。この人は伊予の田舎から身を起し、非常な苦勞の末に旅館を営むようになり、客への気配りと心からのサービスにより、ついに松山第一の旅館にまで発展させ、政府の役人が愛媛県庁に来ると必ずここに泊まるようになった。ニューエルはふとしたことから城戸と知り合い、時折訪問して城戸の話聞くことを楽しみにしていた。城戸は老年に達し、旅館経営は娘とその夫にまかせ、隠居として旅館の一隅に住んでいた。1913年の夏にニューエルは休暇で帰米することになり、城戸屋に挨拶に行った。このとき城戸は85歳だった。四方山の話をしてからニューエルが暇乞いしたとき、城戸は、お差支えな

ければ、ぜひお茶を一服差し上げたい、と言ひ、茶室に招じ入れた。主人は茶席にふさわしい着物に着替えて入ってきた。今までとは違った雰囲気の中に、主人は形式にのっとり、黙々として茶を立て、ニューエルに差し出した。ニューエルは自分の知っているやり方に従って茶を飲み終え、碗を返し、主人が次に自分のための茶を立てて飲んだ。そして口を開き、自分はすでに年であり、これであなたにお目にかかることはあるまいと思ひ、こうしてお茶を差し上げました。私の招きに応じてくださったことを感謝します、と言った。そこでニューエルは、このお茶は、聖書に出てくるイエスの最後の晩餐を思い起こさせてくれました。ですから、どうかぜひ、ここで私に一言、祈らせていただけませんか、と言うと、どうぞ、と主人は答えた。ニューエルはしづかに、ゆっくりと祈りを捧げた。城戸はじっと耳を澄ませて祈りを聞いていた。そして私も、といて、城戸は仏教の祈りを唱えた。まことに奥ゆかしい交わりのひと時であった。ニューエルが翌年松山に帰ってきたとき、城戸はもうこの世の人ではなかった。

#### 8. エピローグ：内村鑑三とニューエルとアーモスト大学

最後に、内村鑑三にまつわるエピソードを紹介して、このエッセイを結ぶことにしたい。日本の英語教育の分野で輝かしい足跡を残した神田乃武（1857-1923）は、死期が迫ったとき、アーモスト大学での後輩にあたる内村鑑三を病床に招き、自分が死んだらぜひあなたに葬式をお願いしたいと頼んだのであった。内村はそれを引き受け、1924年1月4日に東京商科大学において神田の葬儀を執り行い、会衆の心に残る追悼説教をした。偶然ニューエルもその葬儀に出席していた。葬式が終わったあと、ニューエルは内村と雑談していたが、その時内村はニューエルに向かってこんな質問をした。「ニューエルさん、次はぼくが死ぬ番ですが、死んで天国へ行ったとき、まず救い主にまみえた後、誰に一番先に会いに行くつもりであるか、分かりますか」と。ニューエルは、分かりません、と答えた。すると内村はすかさず、「それはシーリー先生ですよ。アーモストでシーリー先生と別れるとき、先生はぼくに、君は日本に帰ったら、日本の人々に福音を説いてまわりなさい、と言われました。ぼくは先生にそうすることを約束しました。天国で先生に会って、先生、私は良い戦いを戦ってきました。走るべき道のりを走り通しました。信仰を保ち続けました。私は先生との約束を守り通しました。どうか喜んでください、と申し上げるつもりです。」と言った。

内村はその追悼説教で神田乃武を「アーモストの子」として捉え、神田の生涯の心からの願ひは、日本にアーモストのような学校を作ることだった、と述べている。同志社の最大の批判者内村であるが、その内村は、同志社こそ、新島襄が日本に作ろうとしていたアーモストであったことを認識していたに相違ない。認識すればこそその批判であったと私は理解する。そして、内村が関係した北越学館が、新潟の同志社たらしめんとする志を持つ

人々の、聖なる試みだったことをも想起するのである。